

恭仁宮以前の遺跡の状況について

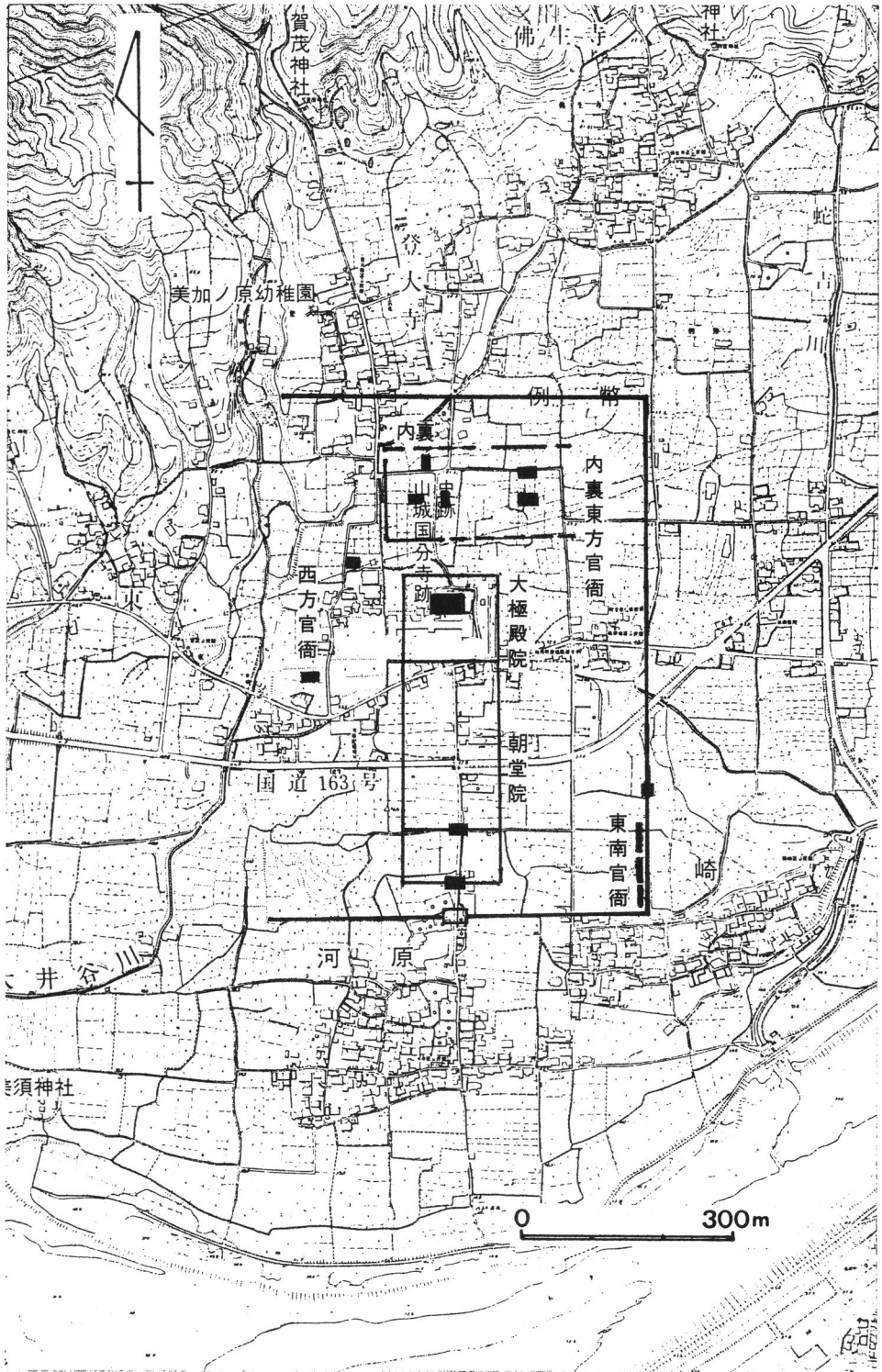
久保哲正

1. はじめに

京都府の最南部、相楽郡加茂町に所在する恭仁宮跡については、昭和48年度以来の京都府教育委員会による長年の発掘調査によって、徐々にではあるが、その全容が明らかになりつつある。特に、近年は、恭仁宮の四至確認調査において大きな成果を上げつつある^(注1)。しかし、この調査の進展に連れて、恭仁宮の実態、殊に、宮の規模が、他の都宮とは著しく異なることが判明してきた。この成果を列記すると以下のようなになる(第1図参照)。まず、大極殿、内裏、朝堂院といった宮内の主要施設についてであるが、これまで山城国分寺の金堂跡としての伝承を持っていた土壇が、恭仁宮の大極殿跡であり、後に、山城国分寺の金堂に再利用されたものであることが判明した。また、大極殿については、その規模から平城宮第1次大極殿を移築したものであることが、ほぼ確実になった。また、この北側に位置する恭仁宮の内裏地区については、掘立柱の1本柱列で構成される塀によって区画されるものであり、現在、西側の大半と南側の一部が確認されている。内部の建物3棟は、全て掘立柱建物であるが、いずれも正殿とは考え難い。この内裏の区画は、大極殿の真北には隣接せず、大極殿とでは中心軸線を異にして、若干、西北方向に偏っているものと推定されている。

内裏地区の東には、内裏東方官衙地区と呼んでいる区画がある。ここでは内裏地区と同様の規模・形状で構成される掘立柱の1本柱列塀跡が、北側を画する外郭線として一部分ではあるが、確認されている。区画内では、四面廂と南北両面廂の大規模な東西棟の掘立柱建物が2棟、南北に並列して検出されている。このうち四面廂建物については、内裏東方官衙地区内の正殿と考えられるものである。この区画が、内裏地区と一体のものなのか、別に区画されたものなのかは、現在のところ不明であるが、いずれにしても、内裏に隣接する特異な形態の区画である。

朝堂院については、その外郭を区画する塀が掘立柱の1本柱列で構成されていること、内部が、狭義の朝堂院と朝集殿院の2区画に分割されていること、朝堂院の南門が掘立柱建物で構築されていること等があげられる。朝堂院内部の建物は、まだ検出されていない



第1図 恭仁宮跡遺構配置図

が、外郭の堀跡については、東、西の各一部と、南辺を確認しており、ほぼ、平城宮第2次朝堂院区画の3分の2程の規模であることが確定できるようになってきた。

次に、宮内の官衙についてであるが、これまでの調査によって官衙と想定されるものは、大極殿の西方において確認された大規模な掘立柱建物を中心にした、西方官衙地域と宮東南隅で確認された狭長な掘立柱建物で構成される宮東南官衙という呼称を与えている地域が知られているだけである。しかし、部分的であれ、このような官衙域と推定される施設が検出されたことにより、宮内にはこの他にも官衙施設が存在するものと予想される。

以上のように宮内における主要な殿舎は、ほぼ、整えられつつあったと想像されるようになってきたが、その配置や規模・形態については、依然、未解明な部分が多く残されている。一方、恭仁宮跡の範囲については、近年、著しい発掘調査の進展に連れて、その全容が明らかになりつつある。ところが、現在、確認されつつある恭仁宮の四周は、これまでの想像を大きく変える特異な形態であることが浮かび上がってきている。従来、恭仁宮の四周については、足利健亮氏による、平城宮跡を参考にした大極殿跡を中心に約1km四方という姿を想定してきたが、発掘調査の結果によると、第1図にも示したとおり、かなり縮小された形になりつつある。宮の南北幅は、平成6年度までの調査で約744mという数値が得られているが、宮域の東西幅は、縮小された正方形と考えて、東西幅も約740mと考えることもできるが、残念ながら、まだ確定されていない。

いずれにしても、恭仁宮の規模・形態等に関する細部にわたる成果は、現在進められている宮域範囲確認の最終調査結果を待たなければならないが、現状からだけでも、恭仁宮の規模が、かなり、縮小されて造営されていたことは確実なようで、今後、都城という意味での恭仁宮遷都をめぐる議論が活発になることが期待される。

ところでこの恭仁宮跡の発掘調査では、奈良時代の恭仁宮やそれ以後の山城国分寺に係する遺構のほかにも、これより以前や以後の遺構、遺物がかなりの頻度で検出されている。以前、筆者は、このうち、恭仁宮以後のこの地域における土地利用について少し触れたことがあるが、ここでは、^(注3) 恭仁宮以前の生活の営みやその環境を通観し、そこから、恭仁宮造成に至る手掛かりを探ってみたい。

2. 恭仁宮以前の暮らし

恭仁宮跡の所在する相楽郡加茂町は、町内のほぼ中央を東西に貫流する木津川によって大きく南と北に分断されている。北部地域は、木津川右岸に形成された自然堤防および沖積平野上に位置する。しかし、集落の北辺は、東西に延びる鷲峰山系の三上山が塞ぎ、そこから派生する多数の小丘陵が木津川に迫るという起伏の激しい地形となっており、宮を

経営するには平坦地が狭いという感は否めない。このため、この地における恭仁宮の造営に当たっては、かなり大規模な造成工事が行われたと想像される。第2図は、恭仁宮の立地する地域の現在の5m等高線地形図であるが、これを見ても、宮の中心施設である内裏・大極殿・朝堂院が造営される図中の中央部分は、明らかに人工的な作業によって南北に広く平坦化されており、旧地形は大きく改変されたと思われる。しかし、この中心地域を除いた恭仁宮域想定部分に目を向けると、必ずしも、平坦化された地形が広範囲に及んでいるとは思えない状況も読み取れる。この造成工事の範囲については、恭仁宮域の設定の問題とも大きく関係してくるものであるが、ここでは、まず、恭仁宮造営以前の人々の暮らしの痕跡について見て行きたい。

『続日本紀』天平14年正月16日条には「……又、家が大宮に入る百姓20人に爵一級を賜う。都内に入る者は男女を問うことなく、並びに物を賚う。」との記事が見える。これによると、恭仁宮造営予定地域内には、20家族ほどが居住していて、宮造成工事によって立ち退かされたことが想像される。これは、恭仁宮直前の古代集落の実体を伝える貴重な史料であるが、残念ながら、発掘調査では、恭仁宮とほぼ同時期の集落に関する遺構は検出されていない。しかし、この記事にもあるとおり、恭仁宮以前にもこの地域には人々の暮らしが存在していたのであり、発掘では、縄文時代にまで遡れる遺構が知られている。以下、恭仁宮以前の遺跡の状況について少し触れておきたい。

恭仁宮域の縄文時代遺跡(第2図)

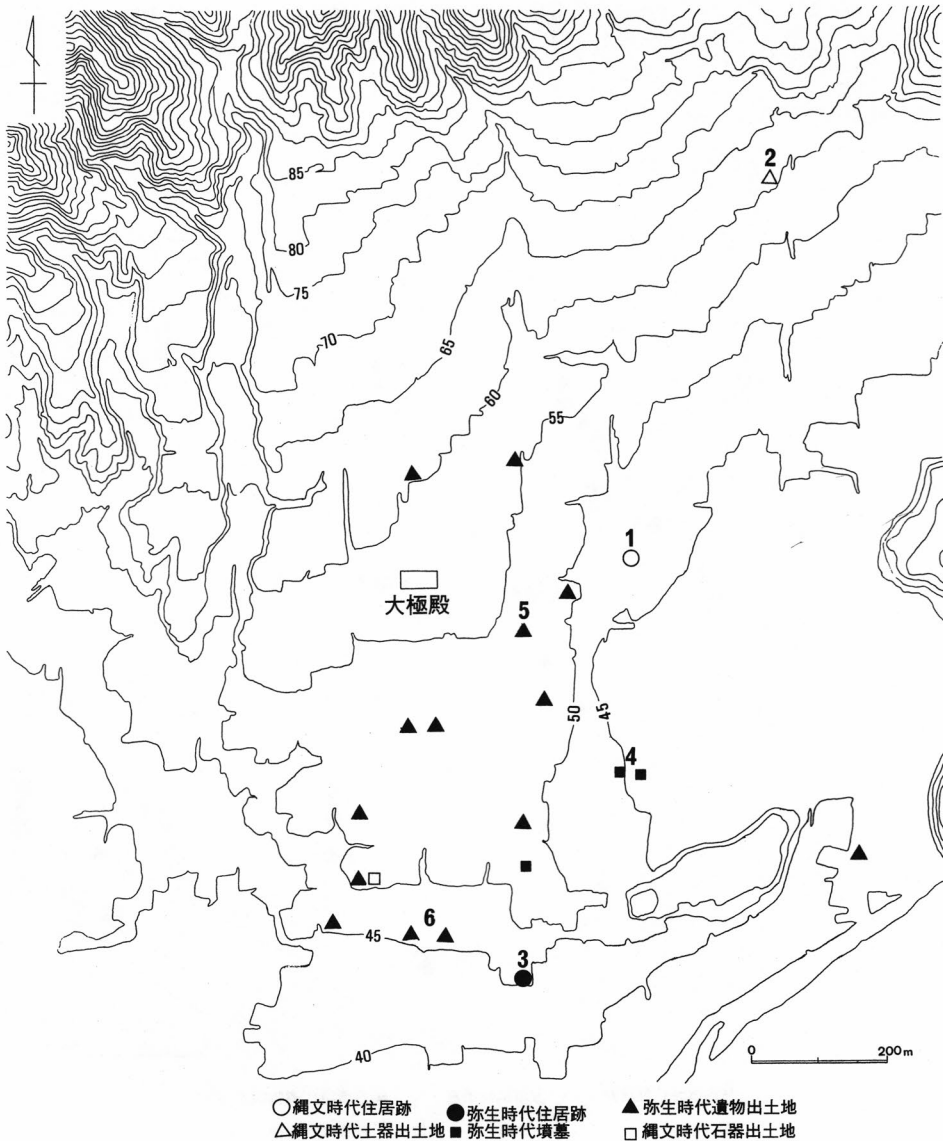
この地域における縄文時代に関する資料は、土器、石器等の遺物についてみると、発掘調査でもかなり広い範囲で出土している。しかし、遺構となると極めて乏しく、唯一、宮の東外方で検出された前期の石器工房かと思われる竪穴式住居跡と土坑群(第2図-1)がある。従来、この付近で恭仁宮以外の時期に属する遺構が検出された場合、大きく例幣遺跡と呼称している。このため、この縄文時代遺構についても例幣遺跡と呼称する。また、遺構は検出されなかったが、晩期の土器を含む遺物包含層(第2図-2)が宮北東外方で検出され、金ヶ辻遺跡と呼称されている^(注4)。このふたつの遺跡で興味深いのは、宮中心部に近い例幣遺跡では、その上層がかなり削平されており、表土である水田耕作土の直下で遺構が認められたのに対し、金ヶ辻遺跡では、奈良時代の遺物を含んだ約1m以上の堆積土の下層から縄文時代の遺物が検出されている点である。

恭仁宮域の弥生時代遺跡(第2図)

弥生時代についても前代と同様に、土器等の遺物は、宮内の中心施設が造営された中央台地部分を含めて、広範囲の調査地から出土している。しかし、集落に関する建物等の遺構となると、検出例は極端に乏しくなり、宮の中心台地上では顕著な遺構が確認されて

いない。住居跡としては、宮域から見て縁辺部にあたる南外方の樋用遺跡で検出された弥生時代後期の竪穴式住居跡1棟(第2図-3)が知られるだけである。また、この時期の墳墓については、宮東限大垣南端部付近で確認された土墳墓(第2図-4)が知られている程度である。いずれも上層は著しい削平を受け、竪穴式住居跡では、周壁がほんの数センチしか遺存していなかった。

弥生時代に関して、その他に注目すべき地域としては、大極殿の東南部および宮南限中央部の南縁辺部(第2図-5、6)があげられる。いずれも、遺構は検出されていないが、



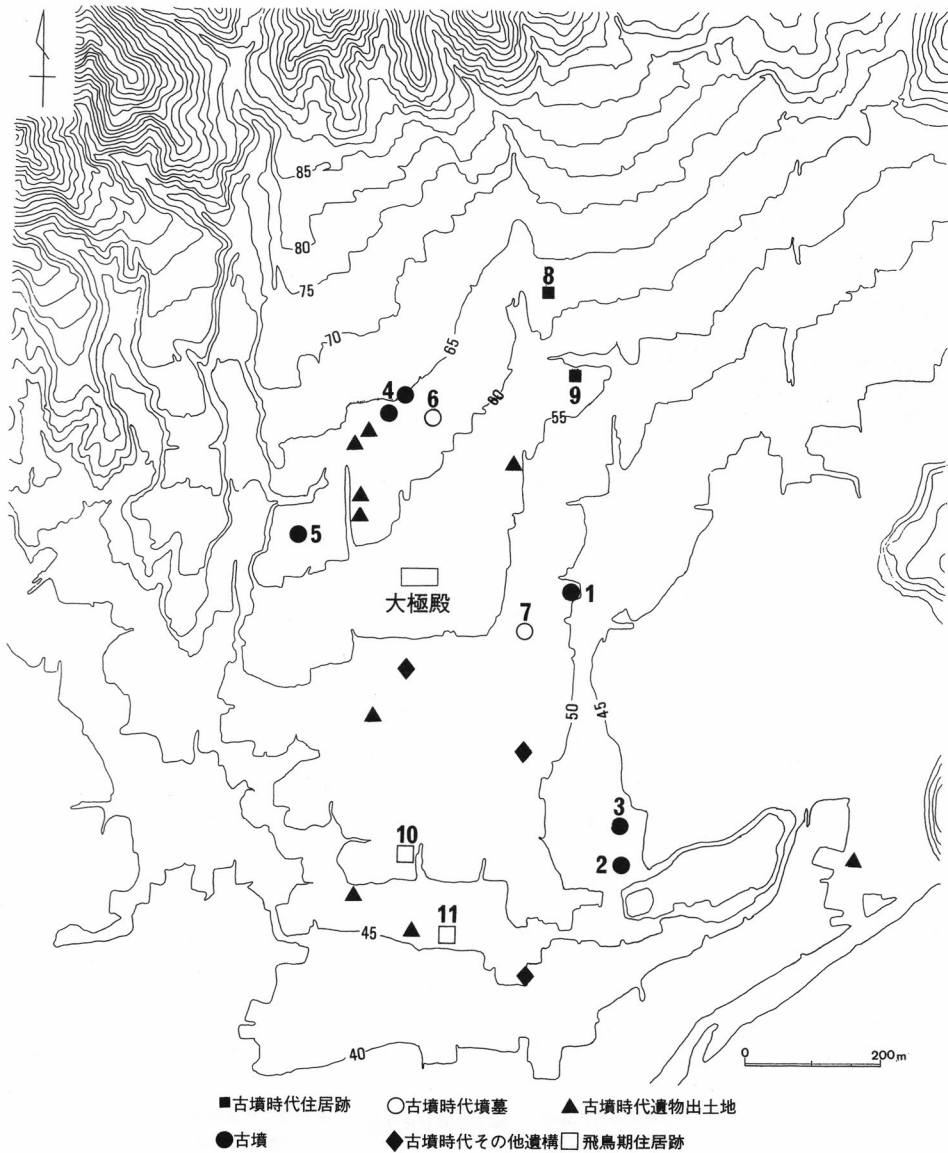
第2図 調査によって確認された縄文・弥生時代の遺構・遺物分布図

弥生時代中期を中心とする土器がまとまって出土している。

恭仁宮域の古墳時代以後の遺跡(第3図)

古墳時代以後になると、遺物、遺構ともに、その量は増大する。特に遺物は、宮域部におけるほとんどの発掘調査地から出土するといえるほどである。また、この時代になると、遺構が検出される例も増大する。中でも特徴的なものは、恭仁宮の造営時に破壊されたとみられる古墳の痕跡が各所で検出されることである。

宮域内調査で検出された最大の古墳は、現在のところ、大極殿の東方で検出された^{かんがえ}考古



第3図 調査によって確認された古墳時代以後の遺跡・遺物分布図

墳(第3図-1)と命名されたものである。この古墳は、上部が完全に削平されていたが、周溝が遺存していたため、規模・内容がほぼ明らかになった。発掘調査の範囲が小面積のため、全容を解明することはできなかったが、周溝を含めた直径約25mの円墳であったと推定される。周溝内には、墳丘から転落した葺石と思える礫が多量に埋没していたが、その下層、周溝底部で原位置を保った円筒埴輪列が検出された。埴輪の年代としては、6世紀前半頃という年代が与えられている。また、礫群の上層では、明らかに埋置されたと思える奈良時代の須恵器壺が出土しており、宮の造成工事に際しての古墳破壊に対する鎮魂儀礼の痕跡ではないかと推定される興味深い資料も検出されている^(注5)。

破壊された古墳としては、これ以外に宮東限築地の南端に近い部分で、古墳時代前期と後期に属する方墳がそれぞれ1基(第3図-2、3)検出されている。また、大極殿の北方や西方においても古墳の周溝ではないかとみられる遺構(第3図-4、5)が、埴輪を含んで検出されている。この他、埴輪片だけが出土する例は、中央台地上やその縁辺部において、比較的多く認められ、検出された以外にも破壊された古墳が存在するものと推定される。古墳以外の墳墓としては、内裏地区の北部で6世紀後半から7世紀前半を中心にする10基程の土壙墓群(第3図-6)が、大極殿の東方、山城国分寺東側築地塀跡付近では7世紀後半頃の土器棺墓(第3図-7)が、それぞれ検出されている。

一方、集落に関係する遺構としては、比較的数量少なく、宮北限築地の北東部域において古墳時代後期の、宮域北東部の外方では前期～中期の竪穴住居跡(第3図-8、9)が、それぞれ1棟検出されているだけで、以外は、性格不明の土坑や溝が数ヶ所で確認されている程度である。

こうした古墳時代の遺構の在り方については、宮の中央を形成する台地が、北から派生する何本かの丘陵の尾根筋を利用し、その先端部を拡張したものと推定されるため、宮中央台地は、通常の生活の場である集落よりも、古墳等の墳墓造営地に適した立地であったためといえるのではなからうか。しかし、古墳時代の遺物分布の特徴からみて、宮中心台地上のみならず、現在の瓶原地域全体に及ぶ可能性が高いことから、発掘調査地が現在の中心部分からさらに外方へ広がれば、今後、宮造成によって削平されていない地域において、まとまった集落遺跡が検出される可能性は高いものと想像される。

古墳時代に続く、飛鳥から奈良時代の初頭にかけての遺跡としては、朝堂院の南部地域から宮南限中央部の南方にかけての範囲でまとまった住居跡群(第3図-10、11)が検出されているところから、この付近にひとつの集落が存在していたものと推定される。しかし、先にも述べたとおり、恭仁宮造営直前の時期の遺跡については、現在のところ、未確認である。今後、確認されてくることは、十分に予想されるが、宮中心部においては削平され

ている可能性もある。また、それとは別に、これまでの調査地点における時期決定の困難な小規模建物跡等についての再検討も必要になるものと考えられる。

以上、恭仁宮造営以前の遺跡について通観してきたが、以下ではこれらの遺跡について若干の考察を行いまとめにかえたい。

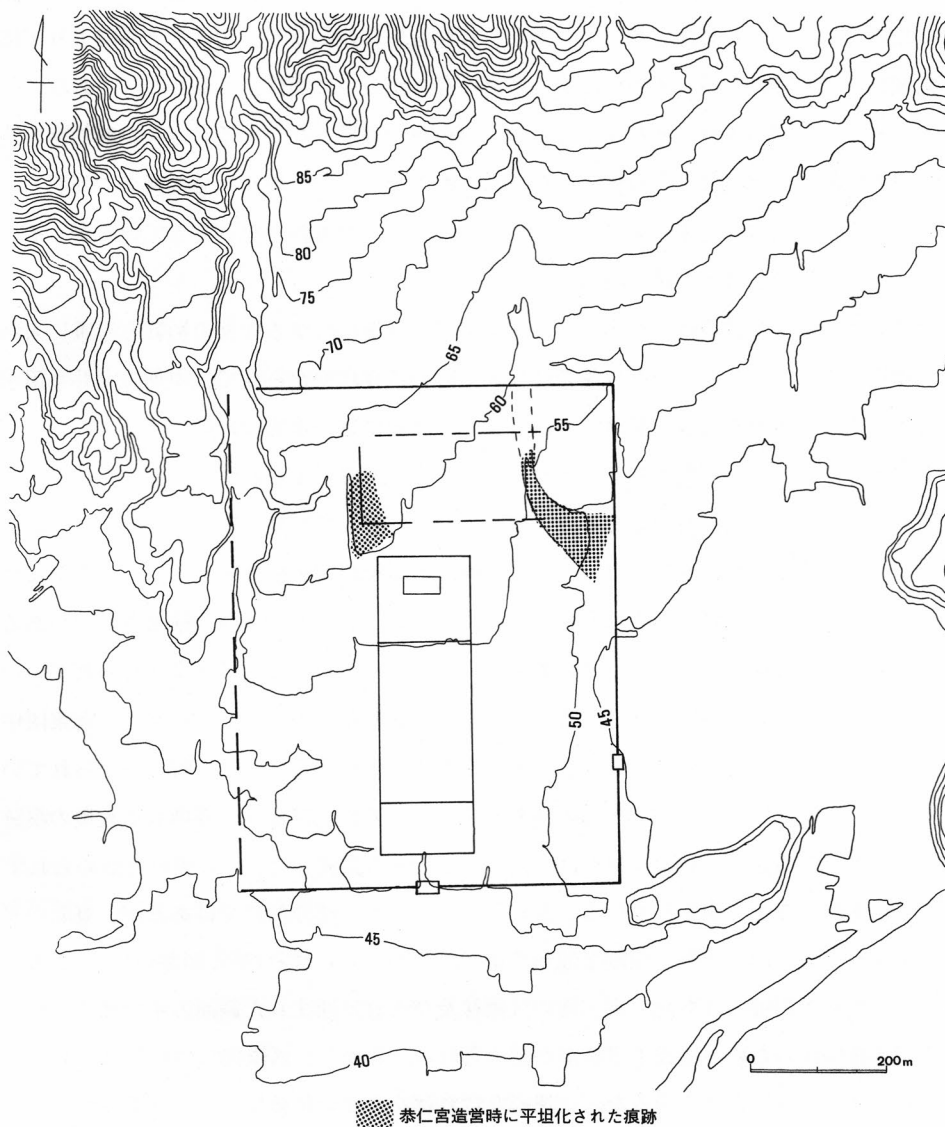
3. まとめにかえて

恭仁宮跡が存在する瓶原地域については、上で見てきたように、縄文時代には確実に人々の生活の痕跡が確認され、以後、弥生、古墳時代と引き続き集落が営まれるものの、恭仁宮という特異な時代の登場によって、その土地の様子が大きく変貌する様子が窺える。ところで、現在のこの地域では、ほぼ全面が水田化された田園風景を展開させているが、弥生～古墳時代にかけての頃には土地の起伏がもう少し激しかったと想像され、水田耕作が可能な土地はもっと限定されていたものと思われる。この地域が平坦化されるのは、やはり、恭仁宮の造成に伴うものと判断されるが、その土地が全体的に水田化されるのは、さらに遅れ、中世以後の伝承を持つ大井手用水の完成を待たなければならないと考えるのが自然なようである。^(注6) 水利や地形的なものから判断して、弥生時代や古墳時代においては、現在の河原～岡崎地区の低地部分の一部が水田化されていた程度ではなかろうか。この状態は、恭仁宮造営の直前まで、原則的には余り変化はなかったものと思える。こうした点から弥生や古墳時代の集落は、比較的小規模なものであったと推定される。

この小さな古代村落であった瓶原地域は、恭仁宮の造営という大工事によって改変され、それ以前の時代の遺跡は、削平・埋立てを受けることになるのであるが、どれほどの規模で破壊されて行くのであろうか。これまでの発掘調査は、極めて部分的な発掘に留まっているため、正確な状況はつかみ切れないが、この調査事例から恭仁宮以前の集落立地等を復元すると共に、宮の四周造成時にどの位の広さを意識して工事に着手したのかを追及できる手掛かりが得られるのではないかと考える。もちろん、この地域の土地の状況については、中世以後の大規模な水田化に伴う改変を考慮にいれておく必要がある。

宮の造成工事についての概略としては、内裏・大極殿・朝堂院といった宮の中心施設が造営される南北の中央台地は削平工事が主となり、周辺部は埋立てによる盛り土工事が進められたものと推定される。縄文時代の集落については、現在のところ、第2図の1、2に示した遺構等しか確認されていないため、集落の広がりや立地については明確ではない。1が大きく削平を受けているのに2は盛り土されているという点は、上の概略に一致しているようであるが、1では奈良時代の遺構も削平を受けており、2は大井手用水に近く、遺物包含層の上層に奈良時代の遺物も含まれるという点で、中世の水田化に伴う一連の造

成工事を考慮にいれておく必要があると思われる。続く弥生時代になると、中央台地上のほぼ全面で遺物が出土するものの、住居や墳墓といった遺構は、台地の縁辺にあたる地点で確認されているだけである。遺物の散布状況からは台地上、特に、55mの等高線より南部地域については、この時代の遺跡が存在していたことがうかがえるが、その遺構が期待される中央台地上55mから50mの等高線で囲まれる範囲は、宮の造成によって大きく改変を受け、平坦化されている。古墳時代以後になると、遺構、遺物ともに台地の北辺部にまでおよぶ広がりを見せ始めるが、前にも述べたとおり、集落については、前代と同様に中



第4図 地形等高線図に見る恭仁宮造営の規模

中央地の縁辺における活動が主で、台地上でも特に北側は、古墳や墳墓の造営地としての役割が大きかったと推測される。

この時期の遺跡、遺構が、宮造成に際して改変を受けたものとしては考古墳をはじめとする多くの古墳がある。台地上で検出された古墳は、大半が古墳時代後期に属する円墳や方墳であるが、いずれも墳丘は削平され、周溝のみがかるうじて遺存していた。その状況から推測すると、各古墳の存在していた部分は、地表面の厚さ約2m前後が削平されたものと考えられる。これは、当然、集落遺構に対しても及んでいると思えるため、現在までの宮中心台地を主な調査対象としてきた発掘調査地の中ではまとまった集落が検出されなかったのではないかと想像される。しかし、これも先に述べたが、50mの等高線より下位の地域については、今後、集落に関する遺構の存在が大いに期待されるところである。

ところで、上記のようにそれまでの各時代の遺跡を破壊しながら造営された恭仁宮の造成工事の範囲は、どれほどの規模のものであったのだろうか。現在、発掘調査で判明してきている宮の四周は、従来の宮に比べ、相当に縮小されたものとなってきているが、その事実と現状の地形とはどの様に関係するのであろうか。

上であげた縄文時代遺跡の検出例から、現地形の状況に対する中世の影響を考慮に入れる必要性は感じられるが、それ以後の時代の遺跡の遺存状態から見て、中世の大井手用水完成後に周辺の土地が改変を受けるのは、おおむね恭仁宮の造成地形に沿ったものでそれを上回るものではなかったと考えるのが自然なようである。すなわち、現在のこの瓶原地域の地形は、恭仁宮造営時の姿を十分に残していると考えても良いようである。その場合、恭仁宮の位置する台地については、平城宮と同等の規模の宮を配置するには、人工的に平坦化されたと思える面積はいかにも狭いものに見える。しかし、現在、検出されつつある宮の四周を地形に充ててみると、その範囲内においては、丹念な造成工事が行われていたようで、発掘調査の結果からだけでも、大極殿の西北部及び大極殿の東北部から宮東限中央部にかけての地点2か所において、谷地形を埋め、平坦化している痕跡が認められている。また、南限については、50mの等高線が明瞭に東西に延びる地形変換点で大垣の痕跡が検出されているが、それより南へは、同一の平坦面を造成したような痕跡は認められず、階段状の地形となって南下している。宮北限についても、部分的にはあるが、東北の角と推定される大垣跡の北側で明瞭な地形の切り離しが認められる(第4図参照)。このように、恭仁宮の四周のうち北・東・南の区画線及びそれに囲まれた範囲の中では、一定の平坦面を確保するための造成工事痕跡が認められる。しかし、西限部については、もしも、平城宮と同じ寸法で宮域を造るなら、埋めなければならない位置に大きな谷地形が存在している。この谷については、南北にその谷筋が通るため、以前より、恭仁宮期に人為的に

整形された宮西限の痕跡ではないかとする意見があった^(注7)。この谷に人工的な整形痕跡が認められるかどうかは別にして、他の三辺に造成の手が加わっているのに対して、この谷を埋めていないという事実は重要である。また、現在、明らかになりつつある宮四周の大垣線を観察して行くと、いずれも周辺外部とでは数メートルの段差を設けて内部を高めている点に気付くのであるが、これが、宮域部分を壮大なものに見せるための造作であるなら、宮西限部は、周囲から隔離するかのようこの大きな谷が最もふさわしいようにも思える。上で見てきたような状況から推測して、恭仁宮の宮域については、当初から、縮小された面積を想定して土地の造成をしていた可能性が強まってきたと思われる。

また、宮域が縮小して検出されてきている中、その外方に広がる恭仁京城における宅地部分についても、今後、注目して行く必要があるが、現状では、広い範囲で造成工事が進められていたか否かについては、あまり大規模な範囲での造成までは着手されていなかったとの印象を受ける。ただ、宮の東方および南方部については上の各時期の遺構の在り方からも、宮の造成工事の一環の中でかなりの平坦化が図られているようであり、京城における条坊地割が期待される地域である。

上記のように、宮の四周については、付近の地形等を考慮に入れて宮西限大垣を南北に延びる谷筋部と想定した場合、大極殿中心から東限大垣までの距離である約270～280mの2倍数、約550mほどの幅が得られる。この550mという距離は、条坊制地割で換算すると約4町分となり、他の都宮の半分ということになる。ところが、南北幅については、約744m(約5町半)という幅であることから、恭仁宮の四周は南北に長い長方形という姿に復元されてしまう。もし、この復元のとおり、南北に長い長方形地割として恭仁宮域が設定されていたとすると、問題は、宮域の形態が特異なものであるということだけに止まらず、宮を取り囲む京城の条坊地割の再検討という大きな課題が生まれてくることになる。

以上、一貫性のない論旨となってしまったが、恭仁宮跡における発掘調査をとおして得られた知見の中で、従来、各年度の概要報告のみに止まり、まとまりのなかった恭仁宮期以前の遺跡・遺構の状況について通観すると共に、恭仁宮の造営規模等についても若干触れてみた。今後とも、広域に及ぶ発掘調査によって、恭仁宮と共にこの地域の歴史的な変遷をも合わせて解明されるよう望まれるところである。

(くぼ・てつまさ＝京都府立山城郷土資料館資料課長)

注1 恭仁宮跡の発掘調査については、昭和48年度以来、京都府教育委員会刊行の『埋蔵文化財発掘調査概報』中に毎年度の概要を「恭仁宮跡昭和48～平成6年度発掘調査概要」として掲載しており、本文中の発掘成果に関する報文はこれに拠っている。

- 注2 足利健亮「恭仁京域の復原」(『社会科学論集』4・5合併号 大阪府立大学) 1973
- 注3 久保哲正「恭仁宮以後の土地利用について」(『考古学与生活文化』同志社大学考古学シリーズV) 1992
- 注4 森島康雄「9. 金ヶ辻遺跡(恭仁京跡)」(『京都府遺跡調査概報』第64冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1995
- 注5 『続日本紀』和銅二年十月十一日条に「造平城京司に勅すらく、若し彼の墳隴、発き掘らるる者は、随って即ち埋み斂めて露はし棄てしむること勿れ。普く祭醑を加へて以て幽魂を慰めよ」との記事がある。考古墳の須恵器壺の出土例は、まさしくこうした鎮魂の儀式を行った痕跡ではないかとみられる。
- 注6 注3の前掲書においても触れたが、この瓶原地域全域が水田として利用できるようになったのは、鎌倉時代中頃に開鑿されたとの伝承を持つ、この地域の北辺を東西に流れる大井手用水完成後と考えると大過ないものと思える。大井手用水に関する記述としては森田恭二「加茂の村落と土豪」(『加茂町史第1巻』加茂町史編さん委員会 1985)に詳しい。
- 注7 中谷雅治「恭仁宮の造作工事について」(『角田文衛博士古稀記念古代学叢論』) 1983